

編集後記

「総合リハビリテーション」が誕生してちょうど1年が過ぎた。小生は最も後輩の編集子として、この雑誌の成長にいくらかでもお役に立てればと思い、ある時は学問的な内容に不安を抱き、ある時は医学書院の台所の方まで余計な心配をしながらも手伝って来た。しかし幸いにも、この雑誌は読者諸兄姉の大きな期待と援助に励まされて一応の安定化を示した。このことは、現代の医療の中に占めるリハビリテーション医学の比重の大きさを物語るものであり、さらには医学のみならず教育、社会、行政などすべての包括的なアプローチで患者を捉えることの必須性を示すものである。専門細分化するほど医療は一方では片手落ちの欠点を示さないでもないし、従来の狭義の医療だけでは最早患者のための真の治療は行えないことは理解されよう。このような陥穽を補うための学術雑誌という意味でこの雑誌は作られた。

いろいろの専門分野とのふれ合いは特集などを通じて

示すよう努力され、しめくくりとして障害児の教育という問題がとり上げられた。城戸正明氏、早瀬俊夫氏、河辺治氏、織田真一氏、倉持義和氏、川口宏二氏、そして鈴木正里氏らの障害児教育に対する不断の努力にただ頭が下るのみである。しかもまだいろいろな点において十分とは云えないことも諸氏の訴えておられる通りである。子供は成長するものであり、子供の病気をわれわれが考える場合教育を抜いて考えることは出来ない。医師として小生もいろいろ学ぶ点が多かったし、特に織田氏の論文には感銘を受けた。本号はその他の一般論文や研究報告でも加倉井周一氏の義肢装具製作者のアメリカの高度なカリキュラムの紹介や中村隆一氏の独特のアプローチなど教育的な点が多かった。

読者諸兄姉の良い年を迎えられさらに飛躍されんことを祈る。

(大井 淑雄)

一年間をふり返って

1年前に本誌に「総合リハビリテーション」の名が与えられたときには、本誌の性格はまだそれほど明確であったわけではない。「はじめに言葉ありき」のように、「総合リハビリテーション」の名が最初にきめられ、いつの間にかその名にふさわしい性格が出来上ってきた。1巻12冊の完結にあたって、その全冊を手にするとき、「総合リハビリテーション」はひとつの生きもののようになすでに自分の呼吸をし、自分の歩みを歩みはじめたことを感ずる。これからの成長ぶりがたのしみである。

(土屋 弘吉)

本誌の最初の1年を送るにあたっての感想は、総合的なリハビリテーション事業の発展のためのいま最大の鍵はやはり、リハビリテーションを専門とし、自己の専門に誇りと愛をもった医師を1人でも多くすることだということである。これは唐突にひびくかもしれない。しかし医師がせっかくリハビリテーションに携っていないながら、真の理解と、そして何よりも信念を持たないために、他の多くの専門職の善意と努力が失われている例が何と多いことか。来る年にかける私の期待は、この点でたとえ一歩でも前進したいということである。(上田 敏)

雑誌の編集は生れてはじめての仕事であり、何事もめづらしく雑誌のできあがりの楽しみも大きかった。内容についてずっと通してみるとやはりでき上りのよいものや、号によっては群盲象を撫でる感が強いものもあり反省している。大きな目的を立てこれに邁進することが大切なこともよくわかっているが、なにさまりハビリテーションというのは幅広いテーマであり、総合するのめたやすすくない。よりよいものとなるよう努力はつづけるつもりである。

(明石 謙)

最近、リハビリテーションとか福祉とかに、関心や認識が高まったということを知り、これは本当なのだろうか。はるか彼方で吹いた嵐で、トイレトペーパーの買占めがおこったり、灯油を心配したりする昨今の世相である。先年のドルショックでさえ、身障者には冷い風が吹き込んだと聞いている。巷に言われる福祉優先が本物なのかどうか、試される機会のようにさえ思える。本当に、この機会にもリハや福祉が大切にされることを祈りたい。

(大川 嗣雄)

大きな流れを持つリハビリテーション医学および総合的な医療を育てるのにわが国の土壌が肥沃ではないと常々考えさせられていたが、腰を落ちつけて個々の分野をじっくり観察してみると、芽は確かに育ち始めている。問題は横の多次元的連繋、総合的な視野で皆が同じゴールに向って物考える習慣をつける必要性が大になっているということであろう。そのような時期に「総合リハビリテーション」誌が発足したことは意義深いことで、課せられた責任の重大さを感じている。(荻島 秀男)

「総合リハビリテーション」が発刊後早くも1年を経過しました。1年分の各号を揃えて見ると、その内容はなかなか豊富で、筆者自身、講義に引用させていただいて大変重宝したこともあります。これは一重に執筆に御協力をいただいた諸先生方のおかげと深く感謝しています。今後共御協力の程をよろしくお願いいたします。現在、この雑誌は登山に例えればまだ2・3合目にさしかかった所で、まだ序の口、これからがその真価を問われる時でしょう。今後読者の皆様から積極的な御意見をお寄せいただいて、この雑誌をより魅力ある雑誌に育てていきたいと願っています。

(横山 巖)